先輩に続け

研究者という選択

東京薬科大学薬学部 助教
薬師寺 文華（やくしじ ふみか）

現在、薬学部は6年制もしくは4＋2年制になり、その進路選択はより複雑化しています。薬学生の進路としては主に、①病院・薬局（薬剤師）、②製薬関連企業（研究・開発・MR等）、③大学・研究所（研究・教育等）、の3種類がありますが、今回は、③を選んだ私の経験をもとに、進路選択についてお話したいと思います。

まず、私の薬学部志望動機ですが、「資格を取得できるから」「親の勧めがあったから」程度の、あまり積極的なものではありませんでした。それゆえ、学部2年生の頃に、薬剤師として働く将来像に違和感を感じ、研究の方へ興味・関心が傾いたように覚えています。丁度その頃、蛋白質発現分野の篠原康雄教授が授業で「実験のスス メ」を説いておられ、気の向くままに研究室を訪問したのが、研究者を意識する最初のきっかけとなりました。その後の研究室配属では「たくさん実験できる研究室」という思いから、迷った末に有機合成薬学分野（宍戸宏造教授）を選択しました。教室のベースについていくのは大変でしたが、博士後期課程を修了する頃になってようやく、有機合成化学の面白味を理解できるようになったかなと思います。

フランス・ルーアン大時計

こんな私ですが、大学研究者になろうと決めた最大の転機は、博士後期課程2年次でのフランス留学にあると思います。研究者として企業に就職するか、大学に残るか迷っていましたが、留学中に取組む研究テーマにおいて、良い結果を出すことができたら大学、ダメなら企業、と渡航前に決めていました。大学研究者は、成果を着実に出し、発表し続けることが求められます。そこで、自分の適性を客観的に判断するため、言葉が通じない、新しい機器を用いて異なる分野に取組む、という状況下、3ヶ月間で成果を出せるのか試すのが適当と考えました。結局、帰国2週間前に所望の結果を得ることができ、大学研究者への道をやっと決心するに至りました。

「いずれかを選ぶ」ということは、どの場面においても難しく、後悔の気持ちが残ることもしばしばあります。そのような時、自分の能力、適性を客観的に判断するために、具体的な目標を設定して実際に取組んでみると、納得のいく結論にたどり着けることが多いかと思います。

さて現在は、東京薬科大学で助教として勤務しており、自身のアイデアのもと、日々研究に取組んでいます。大学研究者の魅力は、好きなことを研究テーマとして設定し、毎日ワクワクしながら過ごせる点にあると思います。薬学研究は、近年、学問分野の融合が顕著で、総合的な観点から研究を展開する力が求められています。これより、研究者を目指すなら、学部生の間は勉強に加え、部活動や友達との交流により、柔軟な思考を養うことが大切だと言えるでしょう。

目標に向かって努力を重ねていると、進路選択につながるような転機がきっと訪れますので、時間を大事にして充実した学生生活を送って下さい。

■略歴
出身地 / 岡山
平成16年 徳島大学薬学部製薬化学科卒業
平成18年 徳島大学大学院
薬科学教育部創薬科学専攻
博士前期課程修了
平成21年 徳島大学大学院
薬科学教育部創薬科学専攻
博士後期課程修了
平成21年 東京薬科大学薬学部 助教

ルーアン大聖堂と町並み

海外体験記

UQ［Brisbane,Australia］での研究

大学院ソシオテクノサイエンス研究部
先進物質材料部門 機能性材料大講座 講師
堀河 俊英（ほりかわ としひで）

日本学術振興会の優秀若手研究者海外派遣事業（常勤研究者）により2010年3月から2011月2月までの1年間オーストラリアのクイーンズランド大学（UQ）へ研究留学する機会を得ました。

UQ（St. Lucia キャンパス）はクイーンズランド州（ケアンズやゴールドコーストがある州）の州都ブリスベン（オーストラリア第3の都市）の中心街から5キロメートル程離れた Brisbane 川の半島に位置し、1909年に設立されたクイーンズランド州最古の大学です。ラッキーなことに私が派遣された年がちょうど創立100周年でした。

私はUQの School of Chemical Engineering で、吸着分野において著名な研究者であるDo教授の研究室でガス吸着現象に関する研究に従事しました。Do教授の研究グループは7名の博士留学生とDo教授だけのアットホームな雰囲気でとても居心地のよい研究グループでした。この決して大きくない研究グループで年に論文10報以上発表する研究スピードは大変刺激的でした（昨年は20報超え）。

キャンパス入口にて

UQの St Luciaキャンパス中心に位置するGreat Court前広場

Do教授の研究グループでは、一般的な日本の研究グループが行っている実験結果を綺麗に纏めた報告書やスライドを用いた研究報告などの報告会を全く開催していません。それに代わるものとして、毎週1、2回程度、朝8時頃からオープンカフェ（学内においしいコーヒーを入れてくれる店がいくつもある）へ行き、そこでコーヒーを飲みながら雑談するというのがあり、そのときにメンバーが新しいデータを持ち寄り、フランクな感じでデータ報告やディスカッションをする、通称 Coffee time と呼ばれるものがありました。Do教授が研究のことや昔の体験談を話してくれるので、自分が取り組む研究以外のテーマに関しても得るものが多かったです。帰国後に私のグループでも同じように Coffee time を作ろうと思ったのですが、残念ながら徳大（常三島）にはおいしいコーヒーが飲めるところがないので断念しました。

派遣期間から帰国してすでに1年が過ぎましたが、現在もDo教授との共同研究を継続しています。週に数回メールで研究のやり取りをしたり、昨年は8月末から2週間、今年は3月初旬に3週間とDo教授のところへ行って研究を行ったりしています。

派遣期間が1年と本当に短期間でしたが、貴重な研究仲間・知人を得ることができ、この留学経験は私の現在の研究活動に大きな刺激を与え、とても有意義なものとなりました。さいごに、日本学術振興会ならびに派遣に伴いご迷惑をお掛けした学科諸先生方に深く感謝申し上げます。

Do教授とグループメンバー